

巻頭言

若者力を活かす大学教育のために

昨年から今年にかけてにわかに政府は教育問題を国家の重要な政策課題のひとつとして取り上げ、教育基本法の改正を始めとして教育関係の多くの法律や規則を改正してきた。また、教育再生会議を中央教育審議会の上に置き、問題の先取り合戦を繰り広げさせている観を呈している。教育の本質は健全な次世代の人間そのものを育成することであり、ものづくりやサービス提供などのような人間の経済活動力の開発とは根本的に区別されなければならない。それゆえに、教育実践や教育評価には特別な価値基準や科学的な根拠が用意されるのが順当であろう。今日の政治や行政あるいは経済の論理や手法の延長線上に次世代の育成事業を置くことは無理としか言えない。

生命はその誕生以来の40億年の歴史の中で、多くの種の創造と多くの種の滅亡を繰り返すなかで、500万年前に人類を誕生させた。生命の歴史は、「強いものや、賢いものを生き残したのではない。変化への適応を懸命に模索・実現したもののみの生存を許したのである（チャールス・ダーウィン）。」環境変化は地球規模の大変化もあれば、局所的な小規模の変化もあり、実に多様である。また、その変化への対応の仕方も同じDNAを有する個体であってもさまざまである。この環境の多様な変化と多様な受容の組み合わせによって、生物は多様な変化に対する強力な適応力を獲得し、個体と集団の持続的な生存を維持発展させているのである。生物世界は多様性の拡大をその発展戦略の基本においているのである。

私たちの現世代が有する人間的な多様性の広がりや、次世代に継承されずに減少し、さらにその次の世代ではもっと減少することになれば、人類は間違いなく滅亡への道程へ近づいていることになる。個々の人間の生きる力や将来の可能性を一つの固定した規格や基準で測定し、集団としての斉一化、規格化をよしとし、価値の定まらない‘はみ出し部分’を粗末にすれば、そこでは新たな変化に適応できる未来開拓能力は育たない。これは人間の持続的な発展を確保する教育の放棄にもつながる。世界中が同じ基準のOECDのテストで優秀な成績を得ることが、本当に優れた地球人類の未来を託せる人材の育成を保証する根拠になるのだろうか。

若者は自ら持てる遺伝子のほんの一部しか発現していなく、多くの個性的な潜在能力の発現を準備している。この潜在的な若者力をどう活かすかを若者は模索し、そのために苦悩しつつも、勇気を与え未来にむけて成熟するための支援・指導を他に求めている。そのための仕組みや内容・方法を科学的な根拠を基にそれぞれの現場で着実に作り続ける事業が教育ということになるだろう。このための能力を磨き、技能を身に付け、そして態度を専門的に養う職業人を教員と呼ぶのだろう。この彷徨える若者こそが未来からの使者であり、未来の開拓者

であるとの立場から、若者の要望に応えうる教育設計と教育実践こそが、実は今日求められている大学教育改革の課題であろうと思う。私たちもこの考えを少しでも実現するために、いろいろな大学教育改革についての試みを始めている。本学の研究活動の一環として特別な研究費目を設けて、学部や学科の教育改善を目指した個別研究を進めている。

この第7号でも、本学の具体的な教育活動を対象にし、教育改革を進める上で直接あるいは間接的にかかわる研究成果を報告している。この事例研究の成果は、本学のみならず他の多くの大学教育の現場にも適応できる科学的な根拠を提供していると確信している。

本号にも本学の客員教授をお願いしています寺崎昌男先生と飯吉透先生には時宜を得た論文を特別寄稿していただきました。感謝申し上げます。

本誌が大学教育の充実のためにいろいろな形で活用されることを期待しています。

2007年12月

学 長 山 下 興 亜